

★今回の例会の前半はベートーヴェンのセリオソをショスタコービッチの短めの曲で挟み、休憩の後の後半はラヴェル1曲となります。以下の解説に示すように大きく言えば前半では無機質な音の絡み合いを鑑賞し、後半では豊かな情感に浸るというプログラムでしょうか。

●エレジー（アダージョ） D. ショスタコービッチ（1906-1975）

1931年、ショスタコービッチはウクライナ北東部の保養都市ハリコフにおいてオペラ第2作となる“ムツェンスク郡のマクベス夫人”の第1幕のピアノ譜を完成させました。彼はちょうどその時、同地に滞在していたジャン・ヴィリオム弦楽四重奏団のためにオペラの第1幕第3場で女主人公のカテリーナが歌うアリアとバレエ“黄金時代（1930年）”の中のポルカを編曲して弦楽のための2つの小品として贈呈しました。その1曲目が本日演奏されるエレジー（アダージョ）です。低弦の上でバイオリンが奏でる旋律がカテリーナが孤独を嘆くアリアの旋律です。

オペラ“ムツェンスク郡のマクベス夫人”は、これを1936年に見たスターリンが激怒してショスタコービッチに対する激烈な批判（プラウダ批判）を開始するきっかけとなった問題作（特に筋立てに問題あり）ですが、このアダージョからはそのような問題は感じられません。

演奏時間 約5分。

●弦楽四重奏曲 第11番へ短調 作品59 セリオソ L. ベートーヴェン（1770-1827）

セリオソとは“厳粛な”、“真剣な”という意味のイタリア語です。ベートーヴェン自身がこの曲に **Quartetto serioso** と名付けています。くだけて言えば“真面目な四重奏曲”となります。歌謡的な要素が少なく、短い無機的、機械的な進行の部分が多いことから名付けられたのでしょうか。

この第11番は1798年に最初の弦楽四重奏曲を書いたから12年後の1810年に書かれました。この後14年間に渡って弦楽四重奏曲は書かれず、晩年の1825年以降に最後の第16番までの5曲と大フーガが書かれました。交響曲の作曲年代と対照させれば第6番（1808年）、第7番（1813年）、第8番（1814年）、第9番（1824年）となります。

第1楽章：アレグロ。冒頭に登場する荒々しい音型が縦横に展開されます。

第2楽章：アレグレット。一応は緩徐楽章ですが、無機的な展開が多く、優しい歌を聞くことはできません。第2楽章と第3楽章は続けて演奏されます。

第3楽章：2つのトリオを持つスケルツォ楽章です。

第4楽章：短い緩やかな序奏の後にロンド形式のアレグロの主部が悲しげな短調のムードで続きますが、最後は突然長調の無窮動的な動きになって終わります。

演奏時間、全曲で20～25分。

●弦楽四重奏曲 第7番嬰へ短調 作品108 D. ショスタコービッチ

ショスタコービッチは1938年から1974年にかけて15曲の弦楽四重奏曲を書いています。（交響曲は1925年から1971年にかけて同じく15曲）1960年に書かれたこの第7番は1955

年に亡くなった最初の妻の思い出に捧げられています。同じ年に書かれた第8番は大変人気があり、後には弦楽合奏用に編曲され室内交響曲としても知られていますが、この第7番はそこまで知られてはいません。3つの楽章から成りますが、すべて連続して演奏されます。

第1楽章：軽い感じのアレグレット

第2楽章：緩徐楽章。2本の楽器の間でのねっとりとした音の絡み合いが続きます。4本の楽器とも弱音器を付けて演奏します。

第3楽章：冒頭には相当な運動能力が要求される激しい部分がありますが、その後は軽い感じとなり、最後はあっさりと終わります。

演奏時間、全曲で約12分と短い曲です。(15曲の弦楽四重奏曲の中で最短)

●弦楽四重奏曲へ長調 M. ラヴェル (1875-1937)

古今の弦楽四重奏曲の中で最も人気のある作品の中の1曲です。初演は1903年ですが、その後改訂されて1910年に出版されています。ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェンらによって書き尽くされた感のあったこのジャンルで彼らから100年経ったこの時期にこのような分かりやすいメロディーにあふれた曲ができたのは奇跡的な事です。フランス音楽に多い循環形式をさりげなく用いており、既出の主題(特に第1楽章の第1主題)が後の楽章にも登場してきます。

第1楽章：2つの主旋律は大変簡明で覚えやすく今日初めてこの曲を聴いた人でも終演後には口ずさんで帰ることができるでしょう。ラヴェル作曲の亡き王女のためのパヴァーヌ、クープランの墓などと通じるような古く良き時代を懐かしむ懐古的な雰囲気にあふれています。

第2楽章：ピッチカート(指で弦をはじく奏法)とトリルが印象的なスケルツォで中間部では主部の旋律がゆったりと奏されます。

第3楽章：緩徐楽章。冒頭のリズムが特徴的です。4本の楽器とも多くの部分で弱音器をつけて演奏します。主旋律はヴィオラによって歌い始められます

第4楽章：変拍子(5/8拍子)の急速な楽章。既出の主題が次々に再登場し、最後は華やかに終わります。

演奏時間 全曲で約30分。